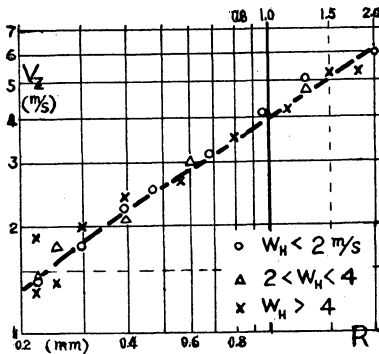
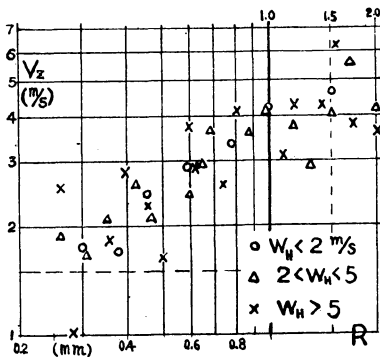


の大な時粒径の小さな側で値がばらつくが、全体としては従来観測されあるいは計算された値と同一傾向をとる。ただし同一粒径でも降水強度の大な時の方が  $V_z$  は大であることが多い。B の資料は  $W_H$  の増加とともに分散し、A のように一定の傾向を示さない。いいかえれば、風のある時には斜面上に落下する雨滴の速さが変化する。

B において観測した個々の雨滴について  $V_v = V_z + V_x \tan \phi$  を計算し、粒径の階級別に平均を求めて見ると

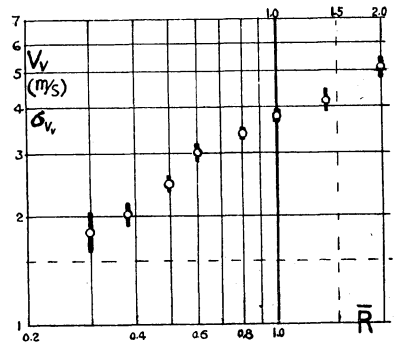


第4図(A) A点における  $V_z$  と粒径の関係、  
R: 雨滴の半径  
(破線は Schmidt の式による値)



第4図(B) B点における  $V_z$  と粒径の関係

第5図の結果をえ、偏差はやや大であるが第4図(A)の傾向とよく一致する。この場合  $\bar{V}_v / W_x$  はほとんどの粒



第5図 B点における  $V_v = V_z + V_x \tan \phi$  と  
粒径の関係  
黒短線は  $V_v$  標準偏差を表す

径について1から1.3であり、 $V_v$  を求めるときに  $V_x$  の代りに  $W_x$  を用いても全体の傾向はほぼ第4図(A)と一致する。

5. むすび 資料の数、種類が充分ではないが次のような考察と今後の問題が指摘される。

(1) ある程度以上のひろがりをもつ斜面上に落下する雨滴の速度は、対気終末速度と斜面上の気流の速度の Vector 和である。

(2) 同大の地表面に同じ粒径の雨が同数落下するとき、地表に作用する雨滴の運動エネルギーは風の状態に応じたかなりの変化(しばしば±50%以上)を示す。

以上の考察を実測値の面から検討するために今後資料をふやすとともに装置の改良、とくに晝間の測定法、降雨時の風の観測法と雨滴の影響の排除、小規模の起伏ある地表面または地物が風および雨滴の運動にあたる影響の量的な観測などをとりあげてゆきたい。

(東京教育大学地理学教室)

書評

グライダーの気象 山下一郎著  
B.6 169頁 光生館 220円

第1篇は気象学の常識で、第1章 観測法、第2章 風、第3章 安定度、第4章 予報、となっている。この予報の所にはもう少し重点を置き、グライダーをやる前日に天気図によってある程度の予想ができるようにするとよいと思う。第2篇はグライダー気象で、第1章で気流を、第2章でテルミックを説明してある。これは本書の主眼点であり、非常に良くできている。おそらくはこれ以上のことは現在望めないのではないかと思う。欲

をいえば頁数の比率が第1編と第2篇が2:1になっているが、これが逆になればよいと思う。そういうふうになるのが発展することをグライダー愛好家ともに切望するものである。著者は学生時代から霧ヶ峯でグライダーをやりのちに霧ヶ峯山頂測候所の建設にあたり、また所長として活躍した人で、表題に関して最良の筆者である。余談であるが、スキーで山頂に立ったとき、あの立派な測候所が跡方もなく消えうせ、土台石に粗氷が淋しく着いているのを見ては、まことに痛惜の感にたえない。

(大井正一)